

震災障害者の輪 ハイチにも

今年1月のハイチ大地震で右足を失ったハイチ人女性(18)が阪神大地震から16年となる来月来日し、神戸市で震災障害者や家族らが集う「よろず相談室」で交流することが決まった。ビザを先週末に取得し、「神戸訪問が楽しみ」と話しているという。

同相談室で今年6月、中国・四川大地震の震災障害者と交流した参加者から「ハイチにも震災の後遺症に苦しむ若者がいるはず。交流したい」との声が上がったのがきっかけ。その場に、ハイチで足を失った被災者に義足を提供している国際医療救済団体「AMDA」(本部・岡山市)の職員がいて、来日を支援することになった。

女性は首都ポルトープランスに住む学生、ガレ・エズナさん。AMDAから中古の金属製義足を提供されたが、生活は苦しく、国の支援もないため、義足用の



来月ハイチから来日し阪神大地震の震災障害者と交流するガレさん＝AMDA提供

右足失った女性 神戸で来月交流

靴を買うこともままならないという。ハイチ女性は暑さをしのぐためスカートが一般的で、AMDAは目立ちにくいプラスチック製義足の提供も検討している。

AMDAによると、現地は医療事情が悪く、地震で負傷した部分が化膿しても十分治療できないなどの理由で、足を切断した震災障害者が4000人を超えるという。また、コレラ感染も拡大している。

1日にコレラ対策のためハイチに向かったAMDAの菅波茂代表(63)は「震災障害者だからこそ、同じ苦しみを理解できる面もある。来日を機にさらに輪が広がってほしい」と期待する。同相談室を主宰する牧秀一さん(60)は「阪神大地震の経験を伝え、ハイチの現状を学びながら、ずっと」ながら続けるよと伝えたい」と話している。